

**木曾川用水総合管理所
柿崎 達也氏**

〔現在の担当業務〕 弥富揚水機場の機械・電気通信設備に関わる障害対応等の保守管理、特別高圧受電設備の切り替え操作や分水口の配水操作、関連施設の巡視点検など。

〔技術の継承〕 機構内で共有している設備経験で得た有用なノウハウや過去の障害事例等を蓄積活用していくことが大切で、各種検討会や訓練等で技術継承が行える仕組みは整備されていると思います。加えて、資格取得等の個々のスキルアップで組織全体の技術レベルを高めていくことも大切です。

〔忘れられない業務経験〕 平成28年利根川夏洪水のころ矢木沢ダム管理所長で、5月下旬に国土交通省利根川ダム統管が、利根川上流ダム群の貯水量が平年を上回る速さで低下。の記者発表がされたあと突如、静かなダムに報道ヘリが来集し、湯水対策本部の設置と同時にマスクミ取材が殺到する大変な状況が続きました。首都圏最大の水瓶



迅速かつ的確な判断能力

として常に注目されるダムで予想もなかった貴重な業務経験をさせてもらいました。余談ですが、全国ネットのTVニュースで私のインタビューが放送された際、四国勤務当時よく通っていた飲食店のママさんから突然「テレビ見たよ」と電話をいただいたりしました(笑)。

〔水機構の強み〕 いろいろな専門分野に対応可能な人材が豊富なことが強みといえるのではないのでしょうか。また、巨大で重要なインフラ施設を造り管理する仕事に携われることも機構の魅力であり仕事へのやりがいを感じます。

〔後輩に向けて〕 私は現役中いくつかの事故や災害を間近で感じ、国土交通省四国吉野川ダム統管出向中に防災情報課長として行政機関の防災体制を経験し、日頃の訓練や事故災害時における迅速かつ的確な判断能力がいかに大事かを学びました。私たちの仕事は水の安定供給はもとより、防災機関として近年の異常洪水等の災害リスクから当機構への期待が高まっていることは間違いありません。後輩職員の方々の益々の活躍に期待しています。

**筑後川上流総合管理所
福島 政則氏**

〔現在の担当業務〕 朝倉三ダム(江川、寺内、小石原)の効率的な水運用管理、各種訓練、工事検査や安全管理に関する工務事務など。

〔技術の継承〕 朝倉三ダムの総合運用は、先に運用する江川、寺内二ダムに小石原川ダムを加えた三つのダムを一つの貯水池として効率的な水運用を行うもので常にきめ細やかな運用操作が求められます。こういった運用ルールに至った筑後川の歴史的背景や経緯を踏まえ、利水者それぞれの立場を理解し、これをしっかりと継承して施設管理に当たっていくことが大切だと考えています。



施設管理の大切さ

月の福岡導水の漏水事故対応です。福岡都市圏の水道用水の約三分の一は流域外の筑後川によるもので、事故発生で速やかに対策本部を設置し、24時間体制で山口調整池からの代替補給や復旧対策を急ぎ、結果的に一週間程度で通水回復できました。しかし、当時は現地でテレビ中継がされるなど、重要施設だからこそトラブル発生で一気に注目が集まる怖さや責任感とともに、必死の復旧対策後に現地でも味わった達成感は今でも忘れられない業務の一つです。他にも、平成29年の九州北部豪雨での江川ダム、平成30年台風24号での宇連ダムでそれぞれ記録に残る洪水量での緊迫した防災操作も強く記憶に残っています。

〔水機構の強み〕 現場事務所が業務多忙時に、筑後川局から機動的に職員を派遣し効率的に業務を遂行する騎馬民族型や流域スペシャリストなど、水のプロ集団として時代変化に的確に対応してきた組織であることが水機構の強みではないでしょうか。

〔後輩に向けて〕 水問題はSDGsに掲げる世界的テーマです。サッカースタジアムや、若手職員の自己研鑽による個の力と関係者とのチームワーク力をそれぞれ高め、さらにグローバルな組織としての活躍に期待しています。

シニア力

連載企画
第2回



定年退職後に機構業務をサポートいただいているシニアスタッフの皆さんに、水のプロ集団を次世代につなぐ技術の継承、将来に向けた思いなどを語っていただきました。

**琵琶湖開発総合管理所
門田 光司氏**

〔現在の担当業務〕 琵琶湖開発に関わる環境保全対策全般の業務補助。施設管理の充実のための維持管理データベースの整理と活用促進など。

〔技術の継承〕 琵琶湖の技術継承で難しいところを一つ上げると洪水時の内水排除操作があります。巨大な琵琶湖周辺の内水排除は他にない特別なノウハウがあり、琵琶湖水位を見ながら周辺河川から琵琶湖に洪水を取り入れる段階、樋門を締めて排水ポンプによる内水排除に切り替えるタイミング、周辺状況の把握に努めつつ内水氾濫被害を最小限にするための運転操作が常に求められます。琵琶湖の特性を踏まえた操作訓練を重視して操作技術と判断力を養い、いつ起こるかもしれない異常洪水にしっかりと備えていくことが



使命感をやりがいに

大切だと思っています。

〔忘れられない業務経験〕 入社2か所の池田総合管理所で水運用の基本的なところを先輩方に教え込まれたことが、その後の水運用計画に関わる仕事に多く関わるようになったきっかけになったと思っています。その延長で川上ダムでの淀川流域委員会対応の経験は忘れられませんし、大変でもやりがいを感じながら当時はやっていた。人とのつながり、大変なときこそ周りを頼りにしたほうがいいことを学んだように思います。

〔水機構の強み〕 大水系で多くの施設を管理していること、流域全体で水運用を行う横のつながりも見ることができるとは機構の強みだと思います。国内総人口の半分以上が住む地域で開発水量の8割以上のシェアを持っていること、これはすごいことです。

〔後輩に向けて〕 こういった影響力の大きい仕事をしている使命感をやりがいとして頑張ってもらいたい。昔は変わらぬ日常を過ごしてもらおう縁の下力持ちとして世間の話題にならないことこそが我々がしっかり仕事ができていることだと思っています。公団から機構組織に移行して20年、今はしっかり組織の存在意義を伝え、水資源の重要性と防災意識を高めてもらう広報への意識も大切なのではないのでしょうか。

**荒川ダム総合管理所
杉田 康司氏**

〔現在の担当業務〕 用地関係を中心に、地域や関係する時事情報の収集整理、施設巡視、イベント・視察対応、安全協議会、防災業務など。

〔技術の継承〕 若手職員の皆さんが、業務遂行の根拠を確認したうえで、工夫したり改善したりするスタンスにつなげられるように心がけています。ただ、建設現場が減って用地や補償業務に馴染みのない中で技術の継承としては、座学的な伝達となる傾向は否めませんが、なるべく一緒に現地の境界杭を確認したりするなど、用地業務に触れられるきっかけを作るようにしています。



現場感覚

〔忘れられない業務経験〕 各事務所様々な思い出がありますが、関係者との補償協議の結果、「私がこの事業に協力することにしたのは、決してあなた方が示した補償内容に納得したからでは無い。あなた達が私達の気持ちを解ろうとしてくれたこと、誰に対しても平等に対応していることが理解できたからである。」とコメントももらったことが補償の業務を経験してきて一番忘れられない出来事です。

〔水機構の強み〕 多くの方々の生活に深く関係する業務を行っており、その分期待されています。それら関係者の方々の声や感覚を敏感に感じ取り、業務に反映させていくことができることが機構の強みだと思います。また、全国から職員が集まっており、現場も各地に存在することで、様々な地域情報や歴史に触れられることも魅力だと思います。

〔後輩に向けて〕 業務を行っていく上で、「現場」を大切にしたいと思っています。実体験による感覚や記憶は、統計的な数値や文面のみからでは蓄積できないですし、現場確認や各種協議も、その場所や実際に対面することで見えてこないものもあります。是非、機械的な分析と、自らの五感で感じ取った「現場感覚」を上手く融合し、経験を培って貰いたいと思います。